

トウモロコシを通じた「親と子」の食育プログラム 活動報告

○佐藤健*, 梅實貴之

鳥取大学技術部 生物生産管理部門 生物生産管理分野

1. はじめに

鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンター（以下 FSC）は農地や森林などのフィールドを活用した研究・教育・地域貢献を実践すること、さらに農学部における総合的なフィールド科学の情報発信基地としての機能を担うことを目的に活動している。

FSC では令和 4 年度に、食と農の大切さを理解する食育の場を提供することを目的として、小学生とその保護者を対象とした【トウモロコシを通じた「親と子」の食育プログラム】を開催したので報告する。なお、本活動は本学の「地域イノベーション創出に向けた実践的教育研究推進プログラム」の地域連携エクステンション活動（実践型）の採択を受けて実施したものである。

2. 概要

開催日時：令和 4 年 7 月 21 日 10 時 30 分～12 時 00 分

開催場所：鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンター

実施者：農学部附属フィールドサイエンスセンター 辻 渉准教授，近藤謙介准教授
技術部生物生産管理部門生物生産管理分野 梅實貴之，佐藤健
学生スタッフ 3 名

参加者：8 組 17 名（申込 12 組，当日欠席 4 組）

内容：1. 講話・実験方法解説	10 時 30 分～10 時 50 分
2. トウモロコシ収穫	10 時 50 分～11 時 10 分
3. 調査・実験	11 時 10 分～11 時 50 分
4. まとめ	11 時 50 分～12 時 00 分

3. 実施内容

3.1. 講話・実験方法解説

FSC の講義室にて食やトウモロコシの種類・来歴・栄養等の講話を実施した。その後、2 つの実験の方法について解説した（図 1）。



図1 講話・実験方法の解説



図2 トウモロコシの収穫

3.2. トウモロコシ収穫

FSC 圃場に移動して、参加家庭ごとにトウモロコシを2本ずつ収穫した（図2）。

3.3. 調査・実験

収穫後、参加者を2部屋の講義室に分散させて、糖度計やヨウ素等を用いた次の調査・実験を実施した（図3）。

実験1. 「鮮度（収穫からの日数）によって味や糖度は異なるのか？」，「保存方法によって味や糖度は異なるのか？」と題して，参加者が収穫したトウモロコシを含む3種類（収穫が1週間前，2日前，当日）のトウモロコシの調査・実験を行った。



図3 実験

実験2. 「収穫のタイミングによって味や糖度は異なるのか？」，「収穫のタイミングによってデンプン含量は異なるのか？」と題して，参加者が収穫したトウモロコシを含む2種類のトウモロコシ（収穫時期が過熟と適期）の調査・実験を行った。

3.4. まとめ

実験後参加者を講義室に集め，実験結果の考察や地産地消・自由研究・農業・農学に関する講話を実施し，その後アンケートを行って終了した。

4. 実施成果

参加者は小学1年生から6年生までの学習状況が異なる幅広い年代であったが，アンケートによる満足度を数値化すると97.5%という高い満足度となった。

5. 参加者の感想

- ・「初めて生で食べてみたら，すごくおいしくて感動しました。農業について考えるきっかけになりました！！先生やスタッフの皆様が分かりやすく教えて下さりとても楽しかったです。」
- ・「ふだん食べている植物に興味，関心を得ることができとても感謝しています。鳥取は田舎ですが，親戚等に農業をする者がおらず，貴重な体験をさせて頂きました。」
- ・「トウモロコシを取るのが楽しかったです。」
- ・「大人もとても楽しめました。」

- ・「トウモロコシ以外の野菜も気になりました。」
- ・「トウモロコシのどの部分が甘いのかも実験してみたい。」
- ・「夏休み初日！とってもよかったです。」

6. おわりに

トウモロコシの収穫作業を各参加者が行うことで、農業体験を行う機会を提供することができた。また、夏休み中に開催することで小学生の自由研究の一助となったと思われる。コロナ禍のためか、開催当日に4組の欠席が発生したのが残念であったが、今後は安心して参加してもらえるような工夫を凝らし、それを周知することで参加者を増やしていきたい。これからも食と農の大切さを理解してもらえるような活動を継続し、鳥取大学の研究や仕事を身近に感じてもらえるよう、FSCと協力していきたい。

* E-mail:k-sato@tottori-u.ac.jp